



財団法人岩手経済研究所  
副理事長

吉田政司

## 「国際研究都市の創立」

東日本大震災津波の発生から1年9カ月余りが経過し、各地で復興の槌音が高く響いている。先に選出された国政の新たな舵取りの皆さんには、新年は、なによりも復旧・復興事業の加速を期待している。沿岸部にあるI社の社長さんによると、「人は少なくなつたが、若い人たちがしっかりしてきている。漁師の跡を継ぐという声も聞くし、商店の二代目が東京から戻ってきている」とのことであり、何とも頼もしい限りである。私たちとしても岩手の未来を拓いていくためには、新たな時代を担う人たちを受け入れる場を造ることが必要であり、人づくりの一環として、それを支援し続けなければならない。

ところで岩手県では東北全体の復興の象徴として、巨大な計画で、新たな産業の創出にも資する国際リニアコライダー（ILC）の誘致に取り組んでいる。リニアは直線、コライダーは粒子衝突型加速器の意味である。正直言つて私自身、2年前まではILCとは無縁に近い状態であつたが、私なりに単純化して言えば、誘致の目的は大きく二つあると考えられる。

一つ目は、宇宙の謎をここ岩手の地で解明することである。宇宙のはじまりは？ 宇宙は何でできている？ 宇宙の将来はどうなる？ といったことを研究するものであり、しかも、この計画は産、学、政・官、自治体ひいては私たち住民など、地域の全てが参加し創りあげるものである。

二つ目は、岩手の県南地方におよそ人口1万人程度の街を新しく創ることである。これまでに例のない、国際機関の日本国内への立地であり、その計画や実現を世界の研究者たちと一緒に行うものである。恐らくは研究者や技術者の国籍は多岐にわたり、一つの国際モデルとして学校や病院など社会資本の整備にも目を向けていく必要がある。

科学技術系の国際分担の例としては、国際宇宙ステーション（米国主導）や、大型ハドロン衝突型加速器（LHC）を備えるCERN（セルン）（欧州プラス日本、米国など）がある。ILCのお兄さん格にあるCERNは、スイスのジュネーブ郊外にあり、欧州合同原子核研究所とも呼ばれる、世界最大規模の素粒子物理学の研究所

である。今から25年ほど前にジュネーブを通り掛かったが、その時の印象は岩手や東北に似ているな、というものであつた。森の緑と湖の碧さゆえのことである。またここは、第二次世界大戦前には国際連盟の本部が置かれ、現在も、数多くの国際機関が所在する世界都市である。盛岡に生まれ、教育者、農学者としても広範な業績が知られている新渡戸稲造は国際連盟事務次長を経験しており、昨年が生誕150年であつたなど、何かしらCERNやジュネーブと、岩手との縁や絆を感じさせられる。

「願わくは われ太平洋の橋とならん」。新渡戸の言葉には、世界の国々が共に向上していくための橋渡しになりたいという意味が込められている。真の国際研究機関が立地するということは、国際科学都市やエリアを創立するということである。私たち地元がどこまで本気で、力を合わせて計画を作り上げられるかが、大きな鍵になる。

さあ今、世界の研究者たちと共に手を携えて岩手の地に国際研究都市エリアを創ろう。その結果、文化としての科学や技術を次の世代に継承できればと願っている。